

●春日部市民文化講座（第 10 回） 「千利休の侘び茶 ～その 5 ー利休の弟子たちー」

◆日時：2014 年 3 月 26 日(水) 10 時（ぽぽら春日部 4 階会議室）～12 時

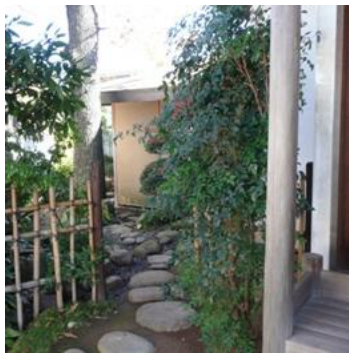
■茶庭・露地の話し

今日は庭師が『庭の話し』をする予定だったのですが、突然出られないという連絡がありまして、ピンチヒッターとして、ぼくが『庭の話し』をします。実は「庭」について、ぼくはもったちゃんとした論文を書きたいのですが、高山右近を調べているうちに『茶の湯の心で聖書を読めば』（Forest Book 刊、写真）が生まれちゃったのですね。この中で「庭」について書いていますが、茶庭って面白いですよ。そこは桂離宮のような広さはないのですよね、日本人が得意の技で庭のエキスをギュウツと詰め込んだものが茶庭であり、露地なのです。



■赤心で出会う露地

庭のエキスとは、飛び石【写真：丘の上記念会堂茶室「在主庵」に続く飛び石、右手は腰掛け待合】であり、蹲踞（つくばい）、灯籠なのです。露地の灯籠というのはこういうものなのです【写真：同露地のキリシタン灯籠と蹲踞】。十分な検証がないのですが、これは高山右近が愛用していた灯籠で、彼が家康によって追放された後に金沢の寺町にある立像寺（りゅうざうじ）に置かれて現存しています。それを明石の石屋さんが寸法を採りに行ってくれて、うちの教会のために作ってくれたものです。この写真は、在主庵の灯籠です。何が普通の灯籠と違うかというと、十字架が地に埋められているようにズドンとしていて、何となく形が十字架に似ていて、何となくイエス様かマリア様か、お地蔵様のようなものが彫られているのです。あるものは、ラテン語なのか何か分からない文字が彫られているものもあるのです。必ずこうして蹲踞と灯籠がセットになって置かれていて、利休さんの侘びの露地にはあるのです。そして茶室に入るまでは必ず飛び石なのです。飛び石でなくちゃ駄目なのです。露地とは言わないのです。露地というのは、露呈するという「露」ですから、自らをさらすという意味になります。相当度胸のある行為ですよ。「赤心（せきしん、嘘偽りのない心）」といいます。だから、一人で良心に恥ずるところのない歩みをして茶室に入っていくのです。そして、露地には中門があり、そこで亭主と客が無言で出会いあいさつを交わすのです。そして、亭主が茶室に入ると、客は



飛び石を渡って蹲踞で清めてから茶室に入っていくのです。そういったプロセスを表した場が茶庭・露地なのです。

■主客による“おもてなし”の真剣勝負

そうした露地を行った先の茶室には躡り口【写真：在主庵の躡り口内外】というのがある、やっと大人が躡ってぐぐって入れる位の小さな入口なのです。利休さんは大男だったと言われているのですが、その利休さんがぐぐって入れる位の狭い入口を茶室には設えなければならなかったのです。これは利休さんの発明なのです。そして茶室に入るときには手がかかる程度だけ躡り口の戸が開いているのです。取っ手がある訳ではないので、お入りくださいという合図が手掛かりを開けておくことなのです。客はその手掛かりに指を掛けて開けて躡ってぐぐって入っていくのです。そして最後のお客さんがピシャッと閉めるのです。そして茶室の狭い空間で、亭主は“おもてなし”をし、お客さんは“おもてなし”を受けようという気持ちで真剣勝負をするのです。亭主と客が愚かな人だったら茶会は成り立ちません。茶室で亭主のもてなしを受けるためには、客が亭主のやっている所作のすべてを読み取るだけの知的教養が求められるのです。そういう約束事をちゃんと学んだ上で茶事を終えると、亭主も客も疲れるけれども終わったあとで、フワ～と「いいお茶会だった」と言えるようなものが生まれてくるのです。だから、お点前の上手下手ではないのです。心の緊張と緩和、そこにある人と人とのこういう係わり。だから、茶事でお茶がよかったお茶が好きだというのは、そこにある“おもてなし”なのです。だから背伸びをしない、あるがままの自分での“おもてなし”があるのです。ですから、茶の湯の「庭」というのは、茶室に入るまでのアプローチです。



■後炭の意味は…！

茶事には炭点前(灰点前)というのがありまして、濃茶の前に行われるのが初座の炭点前で、お薄の前に後座の炭点前(後炭)というのがあります。皆さん、この後炭の意味って何だと思えます。ここからの話しは誤魔化されないように聞いてください。何処の本にも書いていませんし、家元も何も言っていないことで、高橋敏夫が神学や哲学を通してそうかも知れないと思っていることなのですが、利休さんが炭点前をする時は己の死なのです。灰だから土に帰る。ところが茶事でお別れのちょっと間際になって炭を直す・後炭は、死んで灰になって土になって、そこからまだ命がある、まだ茶会の“おもてなし”は続いているんだという印なのです。じゃあ何処でかという、それは天国で続いているのです。死んだら天国に行く、そして神様の茶室で本当の“おもてなし”の茶の湯が続いているのです。みんなプライドとか、大金を持っていたら、あの躰り口は入れませんよ。だから、イエス様は「狭い門から入りなさい」と言っているのです。高山右近は「はい、武士も置いていきます。日本も置いていきます。茶道具も置いていきます。」と言って、利休さんがくれた羽箒一つと書籍だけをもって船に乗って旅立ったのです。それが細川家にある書状に書いてあるのです。その中には、こんなことが書いてあるのです。「利休さんの羽箒は、上辺の下側が良くないよ。でも中の羽根はいい羽根だ」と。だからちゃんと見ているのです。普通だったら全部が為政者たちによって消されてしまうところだったのですが、ちょっとだけ消されずにあるのです。



■灯籠は礼拝のサイン…！

これも文書などで伝わったものではなく、伝説なのですが、高山右近が愛用したという灯籠が残っているのです。ある時には織部灯籠と言われ、キリシタン灯籠と言われているのです。でも、キリシタン灯籠というのは最近のネーミングですから。高山右近が追放される前後の時代に、この灯籠に火が灯っているのは、「我が家の茶室で礼拝をしていますよ」というサインだったのではないかと思います。だって相当数の商人や武将たちがキリシタンだった訳ですから。そして、茶室は躰り口をパシッと閉めると密室になるのです。当時は、教会は禁令のために駄目でしたから、茶室で礼拝をしていたと思うのです。そして、その大きな仕掛け人が古田織部だろうと思ってねらいをつけて調べているのですけれども、なかなかこれは難しいのです。歴史的な証拠は消されてしまっているのです。だから、古田織部という人はつかみどころの無い大きな人なのですけれども、利休さんの侘び茶を正當に受け継いだ人だと思います。しかも、彼も幕府により切腹させられました。謎の死です。豊臣方のスパイだったという噂はありますが分かりません。だけど、千家の古文書には、古田織部は利休さんの7人の弟子の中で「無能」と書かれているのです。だけでも後に上手な人たちが死んでしまったので天下一の宗匠になったとも書かれているのです。

■利休さんの持つ二面性！

もう少し「庭」のことをお話ししましょう。皆さん、パリにヴェルサイユ宮殿ってあるでしょう。とてつもなく大きくて広い宮殿であり、庭なのです。ところが、あのヴェルサイユ宮殿の近くにトリアノンという茅葺きの侘びた小屋、小屋というよりも池まで付いている小集落があるのです【写真:トリアノン】。ヴェルサイユ宮殿とこの茅葺きのトリアノンとは対照的です。そして、マリー・アントワネットはどちらが好きだったかという、ほとんどトリアノンに居たというのです。秀吉は伏見城を作ったでしょう。そして、京都には聚楽第、聚楽亭を作ったのです。そして、そこに千利休の屋敷もあったのです。こちらは数寄屋造りの侘びた家です。一方の伏見城はキンキンキラキラの立派な城です。しかも同じ頃、秀吉は金の茶室を作ったのです。一方の千利休は一畳半の茶室を作っているのです。このコントラスト…。ぼくたちは両面を持っているのです。そういう意味で、利休さんというのは天才ですね。金の茶室だって利休さんの設計ですし、一畳半の茶室も利休さんが造ったのです。だから利休は嫌いだ…という人もいますが、好みは仕方ありませんね。侘び茶というのはコントラストなのです。

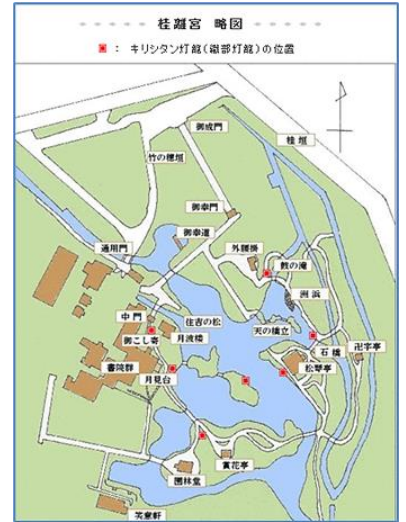


■茶庭…天国の道

「庭」について一口で言うと、庭は天国に行くプロセス道、道程です。茶室は天国、その天国に入る前にちょっと修行がいる。屈んで躰って頭を低くして茶室に入って、後ろの扉をパシッと閉めるのです。だって死んだら戻れないのですから、パシッと閉めて、最後の客であるお詰めは鍵まで掛けるのです。カチャッと内鍵が閉められたら、後から入ることは許されないのです。それが利休さんの仕掛けなのです。そこで“一期一会のおもてなし”がある訳でしょ。そうすると、ぼくにとって利休さんの侘び茶の仕掛けというのは、ちょうどイエス様が山上の説教で物語を語られたような、そのまま、違和感もなく受け入れられるのです。まさに「茶庭、天国の道」なのです。

■桂離宮に仕掛けられた謎

桂離宮に行ったら、ぜひ見てもらいたいのが「7つのキリシタン灯籠」です。これを宮内庁は否定しているのですが、「桂離宮には7つのキリシタン灯籠があります」と宮内庁発行の案内に書いてあるのです。それでぼくは再三手紙を出して食いついたのです。そうしたら、こういう手紙が来ました。「あなたが熱心なので、当園の学者が説明します」ということで、普通は上がって見られないところまで行って説明を受けてきました。庭に出たら直ぐ目の前にある築山のてっぺんにあるキリシタン灯籠というものも見て来ました。それは、これ以上形の良いものはないだろうと思われるほどのものでした。そこから数えると6つのキリシタン灯籠が見えました。そこで何でかなあかずうっと考えていたのですが、聖書のヨハネの黙示録に面白いことが書いてあるのです。「7つの星」と「7つの金の燭台」という言葉があるのです。もしかすると、この黙示録の知識をもった人が、あの桂離宮の庭園に密かに、説明もなしで配置したのではないかと思ったのです。これは全くの独断です。でも、桂離宮は面白いです。桂離宮の造営には 八条宮智仁親王、智忠親王の父子二代が係わったのですが、この人の京屋敷の隣がデウス町(デウス町、一条油小路道と堀川通のあたり)というのです。デウスというのは神様のことで、日本語に翻訳したのが信長の造った「天主閣」です。こうして話したのは全部点で、そうした点を高橋が繋いでいるだけです。為政者によってすべて消されてしまったのです。ぼくが高山右近を追いかけていてこの本が書けたというのは嬉しいことです。

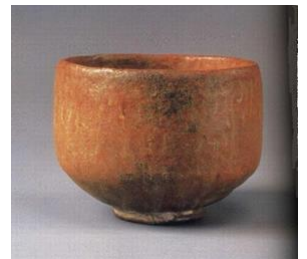


■利休の侘び茶はなぜ長次郎の茶碗なのか？

いよいよ今日の本論です。「利休さんの侘び茶のために、何で楽茶碗なのか」ということなのです。今、「楽」というと、15代続いてきた楽吉左衛門さんで400年も続いているのですが、そもそも利休さんがいた時に、長次郎という人と出会って、こういう茶碗を作ってくれと言ったら見事に作ってしまった。それは、先日の映画『利休にたずねよ』で出たんですよ。ぼくがパンフレットを買ったら、億単位の本物の茶碗が出ているって書いてあったのです。億単位というのはちょっとと思ったのですが、長次郎の茶碗というのは数が決まっていますから値段は付けられないですよ。でも脆いんです。お湯を入れたら、そこで割れちゃうかもしれないぐらいに・・・、だって土器だもん、だからみんなドキドキしちゃう。土っぽいのです。土を捏ねてね、手捏ね(てづくね)轆轤を回さないんです。でもね、轆轤というのは紀元前 3000 年位からあったんですよ。だから、人間が火を操るようになって、土を操るようになって文化が進化してきたのですが、茶の湯の文化というのは文化の中の中心だと思いますよ。長次郎という人について、当代の楽吉左衛門さんは中国人だと言うのです。焼き物の評論家たちの中には、朝鮮系の人だという人もいます。ただ、秀吉の文禄の役よりも前に利休さんは長次郎と会っているのです。有田焼の李参平(りさんぺい)や薩摩焼の沈当吉(ちんとうきち)たちのように、朝鮮から連れて来られた陶工たちではないのです。たぶん、ぼくの推察では、堺に居た瓦職人だったと思います。瓦職人というのは定説です。そうしたら、堺の学芸員の方が丁寧に、昔、堺でも瓦を焼いていて、堺の瓦を2軒発見してくれたのです。だから、「高橋さんの説もまんざらではない」と学芸員の方が評価してくれました。千利休は商人として織田信長と係わっている中で、堺で長次郎と出会い、長次郎に茶碗を焼かせて、それが凄くびたっと合って、今日、楽茶碗はいいということになったのだと思います。これ謎なのですが、利休さんと長次郎がどこで会ったのか、そして、長次郎はどこの国の人だったのかということが。でも、「楽」という名字は秀吉からもらった名字ですから、そして楽が姓で吉左衛門が名です。

■利休は人に似た土塊のやわらかい茶碗を愛した

最後に申しあげたいことは、長次郎の赤茶碗の銘『無一物』【写真】です。長次郎の茶碗というと黒と赤なのです。最初は赤ができたのですが、これは面白いのです。聖書に出てくる最初の人間はアダムなのです。アダムという言葉は「赤い土塊(つちくれ)」という意味なのです。ヘブル語では「アダマー」というのですが、人とは赤い土塊、男とは赤い土塊であり、その赤い土塊は割れて壊れるとまた土に戻ってしまうのです。粘土ですから、土に戻るのです。前回もお話しましたが、850 度という温度は、凄く大切な温度だということに気が付いたのです。ぼくね、日本のさまざまな火葬場に行くたびに、火葬場で焼く人に「今日のこの骨は何度で焼いてくださったのですか」と聞くとね、何処でも 850 度というのです。土器が焼かれる温度が 850 度です。大桶焼きなんかはちょっと温度が高いのです。釉薬が溶ける温度ですから。この間も、大桶年雄さんが来られて、昔と今では全然焼く窯が違う、だから温度が違うと話されていました。だから 850 度をちょっと超えた



あたりの処で釉薬がフツと溶けるのだそうです。それが利休さんにとってはたまらないものだったのでしょうね。押し頂くような、自分の身体、自分の手、自分自身のような感覚で、赤茶碗、黒茶碗を好んで、これが私の侘び茶には相応しいと感じたのでしょうね。そうしたらみんなも、これが素晴らしい、欲しいということになって、高い賄(まいない)を取った、売僧(まいす)だと批難されていますよね。だけど、利休さんのそもそもの侘び茶の道具として、自分に近い土塊に近いやわらかい茶碗、これは日本人が発明した茶碗なのです。その後、皆さんが好きな志野茶碗、好きでしょう。本物欲しいよねえ。ああいうやわらかい茶碗が出てくるのです。

■一皿からのピースフルネス

志野にしても、織部にしても、ああいうものが焼けるようになったというのは、朝鮮から連れて来られた陶工の方々のご苦勞の結果だということを感謝しなければなりません。ぼくたちは、もっと丁寧に韓国の人たちとのお付き合い、“おもてなし”が必要だろうと思います。先日のサッカーの試合であったように、優越感だとか、蔑視するだとか、歪んだ歴史観の中でお付き合いしても、決して良いことはないと思います。その点、ぼくたちの国のトップに立つ人たちのことが心配です。最近、やたらと日本国の誇りを掲げ、道徳教育を振りかざすやり方はどうかと思います。裏千家の大宗匠が「一皿からピースフルネス」、一つのお茶碗で平和を創り出そうと言われているように、あれは第二次世界大戦の中で、特攻隊に行かれて死ぬか生きるかの大変な体験をされてきて、自分が家元になったときに述べられた言葉なのです。だから、ぼくのこういう講座も、平和を創る人になろうよというものです。

■御所丸茶碗から

今週、ぼくの所へ大樋長左衛門さんの長男で大樋年雄さんが、突然来られたのです。それで今度三越で展示会をやるからと言って、パンフレットを置いていったのです。そこには、織部焼茶碗と御所丸茶碗が載っていました。この御所丸というのは、本来は朝鮮の茶碗なのです。御所丸船で輸入されていた朝鮮渡来の高麗茶碗で「御所丸茶碗」なのです。織部焼きというのは古田織部の名前をとっていますよね。これは和物、日本の焼き物なのです。



日本での焼き物ができるようになったのは、秀吉の「朝鮮出兵」で朝鮮から連れて来られた方々の努力によって茶碗が焼かれるようになり、日本各地でさまざまな窯が作られるようになったのです。皆さん、井戸茶碗でご存じでしょ。これは朝鮮の焼き物です。その証拠は、日本で古い窯跡を調べても井戸茶碗のかけらの一片も出てこないのです。本物の「大井戸茶碗」とか、「喜左衛門井戸茶碗」なんかは全部朝鮮で焼かれて日本に来た焼き物です。それが利休さんの目に適ったわけですよ。こうした井戸茶碗が自分の侘び茶に相応しいと利休さんが認めたのです。三島茶碗なんかも後になって日本で焼かれるようになります。染付もそうです。朝鮮から連れて来られた陶工。李参平(りさんぺい)の子孫たちが有田に白い陶磁器の原料となる陶石の鉱脈を発見し、登窯を築造して有田焼が始まるのですが、染付もそこで始まります。日本ではそれまで染付はできなかったのです。それまでで最高なのは、唐物といって中国からやってきた焼き物だったのです。その中で青磁に象嵌で雲鶴の模様を付けた物がありますが、あのほとんどは朝鮮のもですね。残念ながら日本には、そういった技術は全くなかったのです。刷毛目茶碗なんかも100%朝鮮で作られたものだったのです。それを利休さんたちは、お茶碗の型紙を送って作らせていたのです。信長は、そういった良いものをいっぱい堺の商人から大金を払って買い受けたのです。それが一夜にして本能寺の変によって焼けてしまったのです。これは凄い文化遺産の喪失でした。それまで、唐物といって中国や朝鮮から渡ってきた名物がほとんど失われてしまったのです。そうするとどうしても日本国内で茶の湯に相応しい道具を作らなくてはならなくなりました。その時に貢献したのが、連れて来られた朝鮮の人たちだったのです。

■おもてなしの文化を輸出

高麗茶碗の中で井戸茶碗は、高台が深くてすうっと伸びているのですね。そして、轆轤を引いてきて全体がくっついて締まっているのです。日本の焼き物は、長次郎に焼かせたように、手捏ね(てづくね)と言うのですが、土を練って練って作っていくのです。樂さんのところの樂茶碗というのは轆轤を使わないので、飲み口が違うのですね。さて、最近の韓国と日本の関係を修正するのであれば、戦争犯罪は認めなければならないですし、文化的なところから修復すべきだと思います。今まで述べてきたように、日本人は朝鮮の人たちからたくさんの恩恵を受けてきたのですから、茶の湯の文化を輸出したら良いと思います。それが“おもてなし”なのです。ぼくたちが輸出できるのは“おもてなしの心”だけしかないのですから。

この回は、高橋先生による「庭の話」と茶碗を中心とした「利休のわび茶」でした。